

「蝦蟇仙人」考

A Study on “Gamasennin”

張 小 鋼

Zhang Xiaogang

はじめに

2009年、私はロンドン大学SOASの学会で林守篤の『画筌』における中国の影響について発表した。なかには、課題として日中における蝦蟇仙人の解釈についての問題を残した。今回はこの問題についてもう少し展開して考えたいと思う。

蝦蟇仙人とはだれであろうか。江戸時代ではすでに解釈が分かっていた。一つは侯先生の説である（石野廣通『繪そらごと』）。もう一つは劉海蟾の説である（狩野一溪『後素集』卷二）。また、劉海蟾より派生された劉海の説もある。

中国の文献を見ている限り、この問題はより複雑な様相を呈している。たとえば、侯先生、劉海蟾のほかに、劉海、海蟾子などの記述もあり、また、それに関連し三本足の蝦蟇の問題もある。従って、蝦蟇仙人という画題の解釈について再考の余地は十分あると思われる。ここでは中国の文献を照らしながら、一考察を加えたいと思う。

一、侯先生

侯先生については、石野廣通（享保3～寛政12 [AD.1718-1800]）は『繪そらごと』

のなかに次のように述べている¹⁾。

蝦蟇先生なども列仙傳にすなはち侯先生といへるかへる也、其身元来かへるの事なれば小かへるなどもさぞ愛し申されたるべけれど、ゑにかきたるとは少しもやう違也、成程繪にかへるばかり書てはわかちがたし、ゑそら事の尤なる也今の世にもへびつかひはあれどかへるつかひはない。

と、石野廣通は『列仙伝』に基づき、蝦蟇仙人はすなわち侯先生であることを説明していることがわかる。ここで指摘したいのは、文中の『列仙伝』は漢の劉向の『列仙伝』ではなく、明の萬歴28年（AD.1600）に刊行された王世貞（AD.1526-1590）の『有象列仙全伝』である。『有象列仙全伝』卷七には侯先生のことを次のように述べている²⁾。

侯先生。不知何許人。宋大中間。貨藥京師。年四十餘。無須眉。而留贅隱隱遍肌體。嘗醉。夜即與乞丐同處。有馬元者。夏月隨之出閭闔門。侯浴池中。元因就視。乃一大蝦蟆。元遽退隱。侯浴出著衣。元前揖之。侯笑曰。子適見我忽。乃召元飲酒肆中。出藥一粒曰。服之。壽百歲。自此不復見。有自蜀中來者。見其貨藥於市。

（侯先生はどういう人なのかはよく分からない。宋の大中年間、都で薬を売っていた。年は四十余りで、髻や眉がない。瘤のようなものはかすかに体中にあるように見える。かつて酒酔いとなると、夜乞食たちと一緒に寝る。馬元という人がいた。夏の月夜に侯先生の後について城外に出かけた。侯先生が池に水浴しているところで、馬元が近付きその入浴の様子を見ると、なんと大きな蝦蟇であった。馬元は急いで逃げて隠れた。侯先生は池から出て服を着た後、馬元は前に行って侯先生に挨拶した。侯先生は笑いながら言った。「君は私を見かけたでしょう」と。そこで居酒屋まで誘い、一粒の薬を出して言った。「これを飲んだら百歳まで生きられる」と。その後二度と姿を現すことはなかった。蜀から来た人の話によると、彼が市場で薬を売っているのを見かけたことがあるという。）。

文中の侯先生は宋の大中年間の人とされているが、宋には大中という年号がない。大中（A D. 847-860）は唐の宣宗帝（AD. 846-859在位）の年号である。宋には大中祥符（A D. 1008-1016）という年号があるが、それは宋の真宗帝（AD. 997-1022在位）の年号である。だから、侯先生は唐代なのか、それとも宋代の人なのかはよくわからない。ただし、ほぼ同じような記述は明の天順5年（A D. 1461）に刊行された『大明一統志』（明・李賢等撰）にもある。宮内庁書陵部蔵の『舶載書目』（大庭修編）の記録によると、この本は正徳2年（AD. 1712）に日本に輸入されてきた。これを見る限り、『有象列仙全伝』の「侯先生」が『大明一統志』にもとづき編集されものだと推測される。文字の表現を除けば、異なるのは『大明一統志』には侯先生が宋の仁宗帝（AD. 1022-1063在位）の慶

曆年（AD. 1041-1048）の人になった点である。

『有象列仙全伝』はいつ日本に輸入されてきたかは不明である。しかしながら、江戸時代の慶安3年（AD. 1650）にすでに和刻本が刊行された。この事実から見ると、石野廣通が『有象列仙全伝』を目にした可能性は十分あると考えられる。

ところで、橘有税〔橘氏宗兵衛〕『繪本寫寶袋』巻七に「侯先生浴池中成蝦蟇圖」（享保5年9月〔AD. 1720〕刊本、明和7年1月〔A D. 1770〕橘氏守国再板）という図があり、「侯先生」のストーリーに基づき描かれたものである。この絵についてまだ中国の絵柄が見つけていない。おそらく橘有税が構成したものであろう。

なお、橘有税〔橘氏宗兵衛〕にはもう一枚の「侯先生」の絵がある。それは享保14年（A D. 1729）に刊行した『繪本通寶志』巻五下



図版1：「侯先生」



図版2：「侯先生浴池中成蝦蟇圖」

に見られる。この絵には「世に蝦蟇仙人ト云。此人ナルベシ。列仙傳ニ侯先生眉鬚ナシトアリ」との説明が書かれている。すなわち侯先生は蝦蟇仙人であるとの認識を示している。そのためであろうか、画面の構成も蝦蟇仙人が蝦蟇を弄んでいるとなっている。ここでは、橋有税の見解は前掲した石川廣通のと同じであることが注目すべきである。



図版3：「侯先生」

二、劉海蟾

劉海蟾については、狩野一溪（慶長4～寛文2 [AD. 1599-1662]）の『後素集』巻二「劉海愛蟾圖」についての解説がある³⁾。

劉海蟾、唐末人、陽子を師とす、白き三足のかへるを愛す、後終南山に入て鶴に乗て天に上る。

この解説によると、劉海蟾は唐の末の人で、陽子に師事した。白い三本足のカエルが好きであった。後に終南山に入り、鶴に乗って空を飛んで行ったという。これに対し立原翠軒（延享元～文政6 [AD. 1744-1823]）が疑問を呈した。彼は『此君堂後素談』の中に次のように述べている⁴⁾。

蝦蟇仙人、三足の蝦蟇を愛したると云こと諸書に見へす、劉海蟾なりと云人あれとも其傳にはあたらさるなり。常州吉田薬王院に陳竹州と云人の蝦蟇仙の圖あり。狩野一溪はどのような文献に基づき説明した

かはわからないが、彼は徳川家光の御用絵師の立場を利用し、いろいろな貴重な資料を目にすることが可能だろうと推測される。

ともかく、日本では劉海蟾の説が徐々に定説になり、今日に至った。大正14年に刊行された斎藤隆三の『畫題辭典』（博文館）には具体的に劉海蟾について次のように解釈している⁶⁾。

海蟾。姓は劉、名は嘉、支那渤海の人、金に仕へて相位に至る、後、印を納めて、終南に入り道を学びて仙となる、今蓬頭洗足嬉笑の人、手に三足の蟾を持ち之を弄する形を描き、劉海戲蟾の圖といふ、通常は蝦蟇仙人を以て最も多く知らる、鉄拐仙人と對幅とし古く宋元の頃より道釋の一として畫かれ、本朝にては狩野派諸家の筆多し。

この解釈によると、劉海蟾の名前は嘉といい、渤海の人で、金の宰相であった。後に宰相の印を返上し、終南山に入り道を修業することになった。今日ぼさぼさの頭と裸足で、にこにこ笑っている人が手に三本足のカエルを持ち、それを弄んでいる姿を描いている絵は『劉海戲蟾』といい、通常は蝦蟇仙人としてよく知られているという。同じ『画題辞典』にはまだ京都知恩院所蔵の元・顔輝作「蝦蟇仙人」を紹介している。



図版4：「蝦蟇仙人」

この齊藤説を後の金井紫雲の『東洋画題綜覧』と鈴木重三の『原色浮世絵大百科事典』も踏襲した。

ところが、斎藤隆三は中国の出典を説明していなかった。それは清の褚人獲の『堅瓠けんこ戊集ぼしゅう』巻一によるものだと考えられる。次に見てみよう⁷⁾。

按海蟾姓劉名嘉，與哲同。渤海人。十六登甲科，仕金，五十至相位。朝退，有二異人坐道傍，延入談修真之術。二人默然，但索金錢一文，雞卵十枚，擲於案。以雞卵累金錢上。嘉傍視曰，危哉。二人曰，君身尤危，何啻此卵。嘉遂悟。納印，入終南山學道而仙。[略]今畫蓬頭跣足嘻笑之人，手持三足蟾弄之，曰此劉海戲蟾圖也。直以劉海爲名。舉世無有知其名者，錄之以資博識。（案ずるに，海蟾の姓は劉といい，名は嘉という。渤海の人である。十六歳の頃，科挙に合格し，金に仕えることになった。五十歳の頃，宰相まで出世した。嘉は仕事が終わり帰宅の途中，二人の異人が道端に座っているのを見て，家に招いた。嘉は修行の仕方を議論したが，二人は黙っていた。嘉に一文の錢，十個の卵をもって来るように頼んだ。二人は錢の上に十個の卵を積み重ねた。嘉はそばで見て「危ない。」と言った。二人は「君の身はもっと危ない。この卵だけでない。」と言った。嘉はついに悟り，宰相の印綬を返上し，終南山で道を修業し，仙人になった。[中略]今日描かれているぼさぼさの頭で，裸足で，にこにこ笑っている人が手に三本足のカエルを持ち弄んでいる絵は，『劉海戲蟾』という。直接に劉海を名前としたのである。世の中にその名前を知る人がいない。ここに記して広く知られるようにしだい。）『堅瓠けんこ戊集ぼしゅう』と比べ，斎藤隆三の解釈には，

二人の道士が一文の錢上に十個の卵を積み重ねて仏塔の形にした内容がない。ところで，明の王世貞の『有象列仙全伝』巻七「劉玄英」の条項にはそれに近い記述がある⁸⁾。

劉玄英。燕地廣陵人。號海蟾子。初名操。後得道改稱焉。明經事燕主劉守光爲相。雅喜性命之說。欽崇黃老之教。一日忽有道人自稱正陽子來謁。海蟾邀坐堂上。待以賓禮。道人爲演清淨無爲之宗。金液還丹之要。既竟。乃索雞卵十枚。金錢十文。以一文置几上。累十卵於錢若浮圖之狀。海蟾驚異之。曰。危哉。道人曰。人居榮祿之場。履憂患之地。其危殆甚於此。復盡以其錢劈破擲之。遂辭去。海蟾繇此大悟。是夜命家人設宴。棄擲金玉。明早解印辭朝。易服從道。遁跡終南山下。後又入代州鳳凰山。於寧壽觀書龜鶴齊壽四字。西蜀至代數千里。皆同日時而書。以示分形散景。神變無方之妙。丹成尸解。有白氣自頂門出。化爲鶴。飛冲天。元至元六年。贈明悟弘道眞君。（劉玄英は燕の廣陵の人である。号は海蟾子という。最初の名前は操といったが，後に道を得て名前を変えた。經学に通じ燕の主君に仕えて宰相になった。性命の説が好きで，黄帝と老子の教えを崇拝する。ある日，正陽子と自称する道士が突然訪ねてきた。海蟾は彼を応接間に招き，賓客として礼遇した。道士は清淨無為の道理を説明し，また金液還丹の基本を教えた。その後，道士は海蟾に十個の卵，十文の錢を持って来るよう頼んだ。道士はまず一文の錢を机に置き，その上に十個の卵を積み重ねた。見るに佛塔のような形である。海蟾は大変驚いて「危ない。」と，思わずに言った。道士は「人が名譽と利益のある地位におり，混乱の地を往來することは，これよりはるかに危険だ。」

と言い終わった後、銭をもって卵を残さずに割って投げて、海蟾と別れた。海蟾はそれで悟った。その夜、海蟾は家族を集めて宴会を開き、金や玉をすべて放棄した。翌日宰相の印綬を返上し、平民の服を着換え、終南山に隠居し、道の修行に励んでいた。後に代州の鳳凰山に入り、壽寧観という道教の寺に「龜鶴齊壽」といった四文字を書いた。西蜀から代州までは数千里あるのに、同じ日同じ時間に[二つの地方で]書いた。それをもって形や景色を分散させ、変化に富む道教の真髓を示すためである。海蟾は丹薬を作り、仙人になった。白い気が彼の頭の頂上から出て、鶴に化し、空に飛んで行った。元の至元六年に「明悟弘道真君」という称号が贈られた。）

この記述は『堅瓠戊集』と比べ、名前は劉嘉ではなく劉玄英で、最初の名前は劉操である。号は海蟾子である。出身地は渤海ではなく、燕の広陵である。金の宰相ではなく燕の主君である劉守光の宰相であった。一文の銭と十個の卵で仏塔のかたちにして劉海蟾を悟らせたのは二人の道士ではなく、正陽子という人であった。また海蟾子が鶴に化けて飛んで行ったことも『堅瓠戊集』にない内容である。しかしながら、それにしても二つの記述は極めて似通っていることが否めない。なお、清の都邛の『三餘贅筆』に道家の南宗の系譜を述べる際、「遼進士劉操」という記述があるので⁹⁾、その時代は金(AD. 1115-1234)より前の遼(AD. 907-1125)の人とされている。清の俞樾も《茶香室三鈔》巻十八でそれを伝説として確認している¹⁰⁾。

案世傳劉海蟾爲遼進士劉操,純陽弟子也,道家南宗奉以爲祖,觀此知在宋眞宗時已著仙蹟矣。(案ずるに、世の中に伝えていることによると、劉海蟾は遼の進士で、

呂純陽の弟子ある。道家の南宗が彼を祖と尊んでいる。こうした状況を見ると、宋の眞宗帝の頃、劉海蟾がすでに仙迹を残したであろう。)

なお、清の厲鶚の『遼史拾遺』にも「劉玄英」とほぼ同じ内容が記されている。この資料には唯一異なるところは、名前が「劉玄英」ではなく「劉元英」と紹介している¹¹⁾。

海蟾子劉操については、清の紀昀はそれが実在の人物ではなく、金、元の頃の道士たちが虚構した話と主張している¹²⁾。

舊本題華陽山人施肩吾撰。肩吾,字希聖,洪洲人。唐元和十年進士。隱洪洲之西山,好事者以爲仙去。此書中引海蟾子語。海蟾子劉操,遼時燕山人,在肩吾之後遠矣。殆金元間道流所依托也。(古本には華陽山人施肩吾撰と題する。肩吾の字は希聖といい、洪洲の人である。彼は唐の元和十年[AD. 815]の進士である。洪洲の西山に隠居したため、好事者は彼が仙人になったと思いついでいた。この本の中には海蟾子の言葉を引用した。海蟾子劉操は遼[AD. 907-1125]の頃の燕山の人である。肩吾の時代より遙かに後の人である。ほとんど金、元頃の道士達が仮託した話であろう。)

と。ちなみに、宋の李石の《續博物志》巻二に、次のような記述があります¹³⁾。

海蟾子姓劉,名昭遠,華山陳搏館之道院。與種放往來。(海蟾子の姓は劉といい、名は昭遠という。華山の陳搏は彼を道教の寺院に泊めていた。種放との親交がある。)

ここでは海蟾子の名前は劉昭遠とされている。昭和18年に刊行された金井紫雲の『東洋畫題綜覽』(芸艸堂初版、国書刊行会復刻本平成9年5月)は斎藤氏の解釈を踏襲した。ただし出典について、彼は王世貞の『有象列仙全伝』巻二「劉海蟾」の条項を引用している¹⁴⁾。

劉海蟾，汲郡白鶴觀知事崔重微，忽見道人，謁於堂下，揖之坐不語，但微哂，重微起取金相贈未入房已聞弄筆聲，急回視已失道人，壁間有題以仙書，證之乃秦人劉海蟾之筆。（劉海蟾。汲郡の白鶴觀の執事崔重微は、ある日突然来訪の道人を見かけて対応した。互いに挨拶して腰をかけると、黙っていた。ただ少し笑っているだけであった。重微が起きて部屋に戻って金を取り贈ろうとしたが、後ろに字を書いている音が聞こえた。あわてて振り返ってみると、道人は見失った。壁には字が残っている。重微は仙書を持ってきて、照らし合わせてみると、秦の人劉海蟾の筆跡であった。）

『有象列仙全伝』巻二の記述は劉海蟾のことを秦の人としている。これは明らかに前の「遼の進士」や「金の宰相」という記述と矛盾となっている。

以上、中国における劉海蟾についての記述はさまざまあり、日本の解釈に混乱を招いたことがわかった。大体以下の相違点が指摘できる。

- (1) 劉海蟾の名前について、劉海蟾のほかにも、また劉嘉、劉玄英（操）、劉元英、劉昭遠などの説がある。また、海蟾は海蟾子ともいい、号とされる説もある。
- (2) 劉海蟾の生きる年代について、秦、唐、遼、金などの説がある。
- (3) 劉海蟾の出身地について、渤海の人、燕地広陵の人、燕山の人などの説がある。しかしながら、清の紀昀が指摘したように、劉海蟾が金や元の道士たちによって作り上げられた仙人であるという見方は比較的妥当であろう。

三、劉海と三本足のカエル

1. 劉海

前述したように、狩野一溪と斎藤隆三はともに蝦蟇仙人を劉海蟾と認定したのである。注目すべきことは、両氏はともに劉海と蟾（フルネームは蟾蜍といい、蝦蟇、すなわちカエルの一種類）についての図を説明する際、蝦蟇仙人が劉海蟾だと断定したのである。ある意味では、蟾蜍の存在は両氏が蝦蟇仙人はすなわち劉海蟾だと断定する最大な根拠となっているかもしれない。

斎藤隆三が依拠するところは清の褚人獲の『堅瓠戊集』巻一には「今日描かれているぼさぼさの頭で、裸足で、にこにこ笑っている人が手に三本足のカエルを持ち弄んでいる絵は、『劉海戲蟾』という。直接に劉海を名前としたのである。世の中にその名前を知る人がいないので、ここに記して広く知られるように」と、絵に描いている劉海はすなわち劉海蟾のことが明確に説明している。

『劉海戲蟾』という画題は唐代にすでにあった。鈴木敬氏の『中国繪畫總合圖録』によると、アメリカ・フリーア美術館には唐の呉道子の『劉海蟾蜍圖』が保存されているという¹⁵⁾。また清の『古今圖書集成』によると、上元祭の際、『劉海戲蟾』がよく提灯に描かれていたという¹⁶⁾。

熙朝樂事。正月十五日爲上元節。前後張燈五夜。相傳宋時止三夜。錢王納土獻錢買添兩夜。先是蠟後春前。壽安坊而下。至衆安橋。謂之燈市。出售各色華燈。其像生人物。則有老子、美人、鍾馗捉鬼、明月度妓、劉海戲蟾之屬。（康熙朝の楽しいことは、正月十五日は上元祭りである。その前後五日間提灯を掲げる。伝える話によると、宋代の頃はわずか三日間の夜だったという。錢王様は土と金を奉納して二日間を増やした。まずは蠟月立

春の間に、壽安坊から衆安橋までは提灯の市と呼ばれ、いろいろな華やかな提灯を売り出されていた。提灯にはいろいろな絵柄が描かれている。人物には老子、美人、鍾馗捉鬼、明月度妓、劉海戲蟾などの類がある。）

文中の壽安坊や衆安橋は杭州にあり、宋の頃すでにあった。明の田如成の『西湖遊覧志』巻十三に次のような記述がある¹⁷⁾。

壽安坊俗稱官巷，又稱冠巷。宋時稱花市，亦曰花圃。蓋汴京有壽安山，山下多花園。春時賞燕，爭華競靡，錦簇繡園。移都後，以花市比之，故稱壽安坊。自壽安坊而北，至衆安橋。（壽安坊は俗官巷といい，また冠巷ともいう。宋の頃花市といい，また花圃ともいう。要するに汴京〔北宋の都開封〕には壽安山があり，山の下に花園が多い。春になると，皆宴会を開いて贅沢を尽くし，華やかな情景である。都が杭州に移った後，花市を壽安山に見立て，故に壽安坊という。壽安坊から北に行くと，すなわち衆安橋です。）

こうした資料を見る限り，宋代にすでに壽安坊や衆安橋があり，その辺りに上元祭が毎年開催されていた。従って，その祭りに使われた提灯には『劉海戲蟾』の図案がすでにあったと推測される。

2. 三本足のカエル。

三本足のカエルは劉海蟾の蟾という文字から敷衍された話であると考えられる。蟾とは蟾蜍のことである。宋の謝維新の『古今合璧事類備要』巻八十九によると，カエルは蝦蟇ともいい，数種類がある。蟾蜍はその中の一種である。蟾蜍の形が大きく，背中が黒い。斑点がないが，あせものようなものが多いである。お腹の下には赤色の八という文字があり，頭に肉の角がある。世に伝えられている

三本足は嘘だという¹⁸⁾。

蛙。蝦蟆也。數種。有黒虎。有蚯黃。有黃蜈。有螻蛄。有蟾蜍。有山蛤。〔略〕蟾蜍形大背黒。無點多瘡。磊其腹下。有丹書八字。頭有肉角。世傳三足者妄也。（蛙とは蝦蟇のことであり，数種類がある。黒虎あり，蚯黃あり，黄蜈あり，螻蛄あり，蟾蜍あり，山蛤ある。〔中略〕蟾蜍の形が大きく，背中が黒い。斑点がないが，あせものようなものが多い。その腹の下には赤色の八という文字があり，頭には肉の角がある。世に伝えられている三足は嘘である。）

すなわち謝維新が三本足のカエルの存在を強く否定したのである。しかしながら，三本足の蟾蜍の説は根強くあるようである。清の劉獻廷は『廣陽雜記』巻一に，

馬子騰云，陝西邊西番一路西寧，莊浪等處，多三腳蟾蜍。（馬子騰は言う。陝西辺境西番一路の西寧，莊浪などのところに，三本足の蟾蜍が多い。）

と馬子騰という人の話を引用しながら，事実として述べている¹⁹⁾。後に清末の俞樾はこの記述を読み，『茶香室三鈔』巻二十九で次のように感想を述べている²⁰⁾。

按世言三脚蟾蜍天下無有，觀此乃知竟有之也。（案ずるに，世の中には三本足の蟾蜍はどこにも存在しないと言われているが，この記述を読んだ後，はじめてその存在があると知った。）

と。すなわち三本足の蟾蜍は実際に存在することを認めた。なお，伝説では，三本足の蟾蜍はまた「月精」ともいい，月宮に住んでいるそうである。従って月宮はまた「蟾宮」とも呼ばれている。唐の封演は『封氏見聞記』巻七に，

月中云有蟾蜍，玉兔並桂樹，相傳如此，自昔未有親見之者。（伝えるところによ

ると、月の中には蟾蜍、玉兔と桂木があるという。伝える話ではこのようであるが、実際のところでは昔から見たことのある人はだれ一人もない。）

と記している²¹⁾。月宮には桂木があるため、通常、科挙試験に合格することが月宮の桂木の枝を折るよりも難しいという比喩があるため、「蟾宮折桂」という表現がある。



図版5：「月精」

四、中国の年画における「劉海戲蟾図」

「蝦蟇仙人」を考察したうえで、中国の年画も無視することができない。年画は毎年中国の春節に家に貼るものである。王樹村・王海霞の研究によると、年画が北宋に「紙画」、明代に「画貼」、清代に「衛画」（天津）、「画張」（蘇州）、「斗方」（四川綿竹）などと言う。清の道光二十九年に、李光庭の『郷言解頤』という本にはじめて「年画」という言葉が見られたという²²⁾。ちなみに年画の始まりは宋代からだと考えられる。

実際には、上元祭の提灯だけではなく、宋代には『劉海戲蟾』が正月用の年画にもよく描かれたと考えられる。しかし残念ながら、年画はカレンダーと同じく、毎年正月に古いのを廃棄し、新しいのを貼りつけるため、保存されている古い年画は極めて少なく、最も古いのが清代のものであろう。清の年画には、『劉海戲蟾』がすでに存在していた。年画では『劉海戲金蟾』ともいい、劉海と三本

足の蟾蜍のほかに、十枚の銭も構図の要素として欠けない。なお『蟾宮折桂』という科挙成功の年画に敷衍されたものもある。

さらに、年画における『劉海戲蟾』についての解釈はほぼ日本の「蝦蟇仙人」と同じである。たとえば、『桃花塢木版年画』には次のような解説がある²³⁾。

劉海即劉海蟾，是道教中的神明。劉海的故事在民間傳說很早，流傳亦廣，并被編成戲曲。劉海本名操，字昭遠，又字宗成。爲遼進士。後爲呂純陽弟子，道號“海蟾子”，被尊爲全真道北五祖之一。在傳說中，劉海蟾被析衍成“劉海戲蟾”畫中劉海蓬頭跣足，童稚可愛，手持成串金錢，逗引足下靈物三足蟾蜍。民諺：“劉海戲金蟾，步步釣金錢。”他被視作釣錢，撒財，吉祥喜慶的化身。（劉海はすなわち劉海蟾のことであり，道教の神様である。劉海の故事は早くも民間で伝えられ，広く知られていた。さらに戯曲の題材として取り扱われていた。劉海の本名は操といい，字は宗成という。遼の進士である。後に呂純陽の弟子となり，道号は「海蟾子」という。全真道の北五祖として尊ばれる。伝説の中には，劉海蟾は「劉海戲蟾」に敷衍され，絵の中の劉海はほさほさした頭で，裸足で，無邪気である。彼はつながっている銭を手を持ちながら，足元の三本足のカエル[蟾蜍]を弄んでいる。ことわざには「劉海が金色のカエルを弄び，一步一步金錢を釣る。」という。彼は金を釣り，散財，縁起のいいものの化身とみなされている。）

『清末年画』にも同じ見方の解説がある²⁴⁾。

相傳劉海蟾爲五代時遼代進士，後來作了呂純陽的弟子，學道成仙，號海蟾子。民間因其名中有蟾，故又演變了劉海戲金蟾的故事。（伝えるところによると，劉海

蟾は五代の頃の遼の進士であった。後に呂純陽の弟子となり、修行して仙人になった。号は「海蟾子」という。民間では、彼の名前に蟾という文字があるため、劉海が金色のカエル[蟾]に敷衍されたのである。

ここで指摘しなければならないのは、こういった「劉海戲蟾」についての解説と理解がもっと早い時期にあった。清の劉廷璣が『在園雜志』卷四・扶乩佳句に次のように記している²⁵⁾。

劉海蟾 問、世有海蟾像、是大仙否。披、吾乃先朝宰相、得道後、化一戲蟾瘋子、笑遊塵市、以度世人。(質問：世の中に劉海蟾の像があるが、あなたさまだろうか。応え：吾は昔の王朝の宰相だった。道を得た後、蟾を弄ぶ狂人に化け、笑いながら世渡りによって、世の中の人たちを悟らせるんだ)

すなわち当時の民間には占いの言葉としてすでに流行っていたのである。そのような理解がさらに年画に定着しているにすぎない。江戸時代における「劉海戲蟾」の受容が中国の劉海蟾→劉海+蟾という敷衍説によるものであったかもしれない。ただし、絵柄の構図がだいぶ異なる。日本における「蝦蟇仙人」の構図は明の李日華が《六研齋筆記》卷一で説明した通りである²⁶⁾。

雪中展黃越石攜來四仙古像。[略]一爲海蟾子，哆口蓬髮。一蟾玉色者，戲踞其頂。手執一桃連花葉，鮮活如生。(雪中は黃越石が持ってきた四人の仙人の古い像を見せたくれた。[略] その一つは海蟾子である。口が震え、髪の毛がぼさぼさしている。一匹の蝦蟇が玉色で、海蟾子の頭上に座っている。海蟾子が一本の桃とはっぱを手にし、生き生きとしている。)

この記述を見る限り、前掲の元の顔輝の作品と併せて考えると、このパターンの絵は宋・元以後文人画にもよく描かれたと推測される。

この類の構図の絵柄は歴代の作品によく見られる。次に鈴木敬氏の『中国繪畫總合圖録』に収録されている一部の「蝦蟇仙人」と称する作品を見てみよう²⁷⁾。

- ① 明・趙麒『蝦蟇仙人圖』(整理番号JM12-061, 根津美術館, 第三巻日本篇I博物館, 絵に画題なし)
- ② 室町・無名氏『蝦蟇仙人圖』(整理番号JT118-003, 慈照院, 第四巻II寺院・個人, 絵に詩があり, 画題なし)
- ③ 清・閔貞『蝦蟇仙人圖』(整理番号JP12-122, 個人コレクション, 第四巻II寺院・個人, 絵に画題なし)
- ④ 清・胡媚『蝦蟇仙人圖』(整理番号JP34-035, 山口良夫コレクション, 第四巻II寺院・個人, 絵に画題なし)
- ⑤ 清・周笠『蝦蟇仙人圖』(整理番号JP36-030-5, 細川護貞コレクション, 第四巻II寺院・個人, 絵に画題なし)



図版6：蘇州清末年画「劉海戲蟾」



図版7：山東濰坊清末年画「劉海戲蟾」



図版8：四川綿竹清末年画「蟾宮折桂」

- ⑥ 明・郭詡『蝦蟇仙人圖』（整理番号E 18-086, ベルリン国立博物館東アジア美術館, 續編第二卷アジア・ヨーロッパ篇, 絵に画題なし）
- ⑦ 南宋・梁楷『蝦蟇仙人圖冊』（整理番号J M18-040-19, 出光美術館, 續編第三卷日本篇, 蝦蟇に乗っている仙人, 絵に画題なし）

注意すべきことは、これらの作品は構図が似通っているが、みな絵に画題が書かれていない。そのため鈴木氏が自分の理解によってそれらの絵に「蝦蟇仙人」や「劉海戲蟾」といった画題を付けたのである。いうまでもなく、鈴木氏の判断が氏の豊富な美術史の学識や鋭い鑑別力に基づいたものであり、任意的なものではないと思われる。したがってこの理解と判断は日本では普遍的なものと言えよう。

おわりに

以上、蝦蟇仙人について考察してみた。筆者は次に指摘することができるだろうと思う。

第一に、「蝦蟇仙人」は中国の画題であるが、日本語である故に、最初から明確な概念がなかったのである。そのため、侯先生と劉海蟾と劉海などの記述があったが、最終的には、劉海蟾→劉海+蟾とする解釈の方が定説になった。その原因は劉海蟾の名前が蝦蟇と大きな関係があることがいうまでもないが、

仙人としての侯先生が劉海蟾と比べれば、関係資料が少なく、それほど注目されなかったのも一因であろう。

第二に、中国における劉海蟾についての記述が様々あるので、日本の解釈に混乱を招いた。劉海蟾は定説でありながら、劉海+蟾というパターンに変わっていく。従って、蝦蟇仙人も「蝦蟇+仙人」という解釈となった。

第三に、中国における「劉海+蟾」は宋代よりすでに年画や提燈画に定着しており、その構図は劉海が糸で繋がっている銭をもつて、三本足の蟾蜍を弄んでいるパターンとなっていた。一方、日本における「劉海+蟾」は劉海蟾の構図であり、裸足で、ぼさぼさの頭、にこにこ笑っている姿であり、肩や頭に一匹の蝦蟇というパターンとなっている。劉海が糸で繋がっている銭をもっている構図は見られない。その構図は宋・元以後の文人画の影響も考えられる。

【注釈】

- 1) 石野廣通『繪そらごと』（坂崎坦『日本畫談大観』, 目白書院大正6年7月, 725頁）
- 2) 明・王世貞『有象列仙全伝』卷七, 萬歴28年[A. D. 1600] 刊本
- 3) 狩野一溪『後素集』卷二（坂崎坦『日本畫談大観』, 目白書院大正6年7月, 566頁）
- 4) 立原翠軒『此君堂後素談』（坂崎坦『日本畫談大観』, 目白書院大正6年7月, 750頁）
- 5) 斎藤隆三『畫題辭典』（博文館, 大正14年10月, 65頁）
- 6) 清・褚人獲『堅瓠^{けんこぼしゅう}戔集』卷一, 康熙二十九年 刊本
- 7) 明・王世貞の『有象列仙伝』卷七, 萬歴28年[A. D. 1600] 刊本
- 8) 清・都邛の『三餘贅筆』（不分卷, 叢書集成）には南宗の継承の系統が次のように記している。今之道家有南, 北二宗。其南宗自東華少陽君得老聃之道, 以授漢鍾離權。權授唐進士呂巖, 巖授遼進士劉操, 操授宋張伯端, 端授石泰, 泰授薛道光, 道光授陳抃, 抃授白玉蟾, 蟾授彭耜。（今

- 日道家は南・北宗に分かれている。その南宗は東華少陽君が老子の道を得て漢の鍾離権に伝えた。さらに権が唐の進士呂巖に、巖が遼の進士劉操に、操が宋の張伯端に、端が石泰に、泰が薛道光に、道光が陳枏に、枏が白玉蟾に、蟾が彭栢に伝えた。）
- 9) 清・俞樾『茶香室三鈔』巻十八，中華書局1995年2月，1269頁
- 10) 清・厲鶚『遼史拾遺』巻二十一，列伝第三十八に薛大訓の『神通鑑』の内容を次のように紹介している。
 薛大訓神通鑑曰，劉元英，字宗成，號海蟾子，初名操，字昭遠。後得道改稱焉。燕地廣陵人也。一云大遼人。以明經擢第，仕燕王劉守光爲相，素喜性命之說，欽崇黃老之教。〔後略〕（薛大訓の『神通鑑』に曰く，劉元英，字は宗成，号は海蟾子といい，元の名は操，字は昭遠という。後に道を得て名前を変えた。彼は燕の広陵の人である。一説は大遼の人である。明経をもって科挙に及第し，燕王の劉守光に仕えて宰相である。生来性命の説を好み，黄老の教えを尊ぶ。）
- 11) 清・永瑤等撰『欽定四庫全書総目』巻百四十七子部・道家類存目，中華書局1965年6月，1259頁
- 12) 宋・李石《續博物志》巻二，上海古籍出版社1991年12月，四庫全書影印本
- 13) 明・王世貞『有象列仙全伝』巻二，萬曆28年〔A D.1600〕刊本
- 14) 鈴木敬氏『中国繪畫總合圖録』第一巻・アメリカ・カナダ篇（整理番号A21-011, Freer Gallery of Art, 絵に画題なし，東京大学出版会1982年）
- 15) 清『古今圖書集成』經濟彙編・考功典巻二百三十一燈燭部雜録六
- 16) 明・田汝成『西湖遊覽志』巻十三，
- 17) 宋・謝維新『古今合璧事類備要』巻八十九
- 18) 清・劉猷廷『廣陽雜記』巻一，中華書局1957年7月，40頁
- 19) 清・俞樾『茶香室三鈔』巻二十九，中華書局1995年2月，1424頁
- 20) 唐・封演『封氏見聞記』巻七，中華書局2005年11月，67頁
- 21) 王樹村・王海霞『年画』第一節，浙江人民出版社2005年3月，1～3頁
- 22) 『桃花塢木版年画』，江蘇古籍出版社・香港嘉賓出版社1991年，29頁
- 23) 『清末年画』，上海図書館所蔵，人民美術出版社2000年5月，318頁
- 24) 清・劉廷璣『在園雜誌』巻四，中華書局143頁
- 25) 明・李日華『六研齋筆記』巻一，欽定四庫全書子部・雜家類
- 26) 鈴木敬氏『中国繪畫總合圖録』，東京大学出版会，1982年

【図版】

1. 明・王世貞『有象列仙全伝』巻七，萬曆28年（1600）刊本，上海古籍出版社1988年8月影印本
2. 橋有税〔橋氏宗兵衛〕『繪本寫寶袋』巻七，享保5年9月〔AD.1720〕刊本，明和7年1月〔A D.1770〕橋氏守国再版，ロンドン大学SOAS図書館スペシャル・コレクション所蔵
3. 橋有税〔橋氏宗兵衛〕『繪本通寶志』巻五下，享保7年〔1729〕刊本，個人所蔵
4. 大和文華館編集・発行『開館35周年記念特別展 対幅－中国絵画の名品を集めて－』図版16，平成7年10月）
5. 明・程大約『程氏墨苑』巻八，萬曆37年〔AD.1609〕刻本，上海古籍出版社1994年10月影印本
6. 『蘇州桃花塢木版年画』，江蘇古籍出版社・香港嘉賓出版社1991年9月
7. 『中国濰坊清末年画』，山東画報出版社2004年4月
8. 綿竹年画博物館編『綿竹年画精品集』，四川美術出版社2005年5月

付記：この論文は筆者が2010年に立命館大学の国際シンポジウムで口頭発表に基づき，補充・整理したものである。なお，発表にあたって岩切友里子先生に貴重な助言を頂いた。ここで感謝の意を申し上げる。